すみだ地域学情報 We!

第50号
2019年
（令和元年）
10月発行

発行：墨田区（地域活動推進課）
〒130-8640　墨田区吾妻橋一丁目23番20号
☎03-5608-6202　FAX 03-5608-6934
✉KATSUDOSUISHIN@city.sumida.lg.jp

つながる墨田区

祝50号!! 平成から令和へ

「We!」に込めた想い

世界一高い電波塔である、東京スカイツリー®の建設が、押上・業平橋駅周辺地区に決まった翌年の平成19年（２００７）、「すみだ地域学情報Ｗｅ！」は生まれました。東京スカイツリーの建設により、すみだが大きく注目され、国内外から多くの方が、すみだを訪れることが予想されました。そのような中、すみだに暮らす「私たち」が、まちを知ることで、訪れる方々にすみだの良さを伝え、「おもてなしの心」で迎え入れることができるようにと、本紙の発行が始まったのです。

「Ｗｅ！」という名称には、すみだという「私たち」のまちの歩み（歴史、文化等）を知り、現在を知り、これからの「私たち」のまちを考えていくための様々な地域情報を、掲載していきたいという想いが込められています。

それから12年、本紙は記念すべき50号を迎えました。様々な分野の皆様の執筆協力によって、50号を迎えられたことを、この場を借りて御礼申し上げます。

さて、本紙の創刊号から8号の中では、古代から平成18年３月までの墨田区の歩みを掲載しましたが、本号では、その後、「令和」へと向かう区の歩みを振り返ります。

平成から令和へ

平成20年７月に、東京スカイツリーが着工すると、空に向かって少しずつ伸びていく姿を見ようと、カメラを提げた多くの方々が、訪れるようになりました。平成24年５月、東京スカイツリーは、水族館やプラネタリウムも併設され、区の新たなランドマークとして開業しました。

平成28年11月、亀沢の地にすみだ北斎美術館が開館しました。世界的な画家として評価の高い葛飾北斎は宝暦10年（１７６０）に本所割下水付近（現在の墨田区亀沢付近）で生まれ、90年の生涯のほとんどを墨田区内で過ごしながら、優れた作品を数多く残しました。区は、この偉大な芸術家である北斎を区民の誇りとして永く顕彰するとともに、すみだ北斎美術館を、地域の産業や観光へも寄与する地域活性化の拠点としました。

そのほかにも、郵政博物館（平成26年）、たばこと塩の博物館（平成27年）、刀剣博物館（平成30年）等が移転・開館し、区内に点在するすみだ小さな博物館（現在29館）とともに文化的側面から、まちづくりに大きく貢献しています。

一方、区政に目を転じると、墨田区が注目度を増していく中、平成21年、世界のホームラン王と呼ばれた王貞治氏と、押絵羽子板職人の西山幸一郎（鴻月）氏を、墨田区初の名誉区民として顕彰しました。お二人の功績は、錦糸町にある墨田区総合体育館２階（王氏のみ）や、区役所１階の名誉区民顕彰コーナーでご覧いただけます。

平成22年には、墨田区協治（ガバナンス）推進条例を制定し、区民の皆さんと区がそれぞれの果たすべき役割と責任を分担し、ともに考え、ともに行動し、地域の課題を解決していくまちづくりの形を示しました。また、平成28年６月に、協治（ガバナンス）を基本理念とした、区基本計画を策定しました。本計画では、「すみだで暮らす人、働く人、訪れる人の夢や希望がかなえられている状態」＝「すみだの夢」の実現に向けて、〝夢〟実現プロジェクトを掲げています。

平成29年、墨田区制は70周年を迎えました。第２次世界大戦が終わり、焼け跡から再建の歩みを始めた、昭和22年（１９４７）３月15日に本所区と向島区が合併し、墨田区が誕生しました。当時の人口はわずか14万人でした。その後、昭和38年（１９６３）に最多（約32万６千人）を記録して以降、人口は減少傾向にありました。しかし近年、多様な施策により、まちの魅力や認知度が高まり、また、都心回帰の傾向も相まって人口増加に転じ、平成30年４月には27万人を上回りました。

そして、令和元年。来年に控えた２０２０東京オリンピック・パラリンピックでは、両国国技館でのボクシング競技実施が決定し、墨田区はますます盛り上がりをみせています。「令和」には、「人々が美しく心を寄せ合う中で、文化が生まれ育つ」という意味も込められています。人と人とが温かい心でつながり、支え合う「人つながる墨田区」を、そこに暮らす「私たち」自身でつくっていけるよう、これからも様々な情報をお届けします。

すみだの商店街
～その２～

前号（その１）では、商店街全体としての戦後から現在の流れ、商店街活動における役割や、これからの商店街は個店の魅力アップが不可欠であること等、商店街全体について紹介しました。今号（その２）では、下町人情キラキラ橘（たちばな）商店街（正式名称・向島橘銀座商店街協同組合）について紹介します。

１９７０年代は、キラキラ橘商店街の変革期でした。その当時、現在商店街役員になっているメンバーが青年部を立ち上げ、「朝市」なるイベントを開始し、自分たちから積極的に商店街活動に関わり始めました。

１９８８年には、東京都コミュニティ商店街事業の認定を受け、カラー舗装、街路灯整備、アーチ建て替えなどのハード整備事業を行いました。またソフト面として、地域の方から必要とされる商店街でありたいという思いから、地域に愛されるような愛称を一般公募し、ハード事業完成式典の際に「下町人情キラキラ橘商店街」を採用しました。それ以降は「キラキラ橘」と呼ばれています。

１９９５年～２００７年、バブルの崩壊や大店法から大店立地法への移行等により、商店街を取り巻く競争環境は厳しさをましていきました。その中で、駅から離れている地域密着型商店街の「キラキラ橘」では、販売促進イベントの「朝市」「びっくら市」「中元・歳末福引売出し」や、長さ４７０ｍ幅員５ｍのキラキラ橘を安心・安全に使って頂くコミュニティイベントの「ワイワイウィーク」「手作り七夕まつり」「夜市」などを開催してきました。どのイベントも30年以上継続しており、地域の方にも長く親しまれています。

２００７年～２０１９年には、商店街活動の課題が浮き彫りとなってきました。商店街経営者の高齢化や後継者問題に伴い、マンパワーが不足していきました。それを少しでも補う為に、外部の組織や団体、高校、大学との連携に取り組むようになりました。地域の劇団との連携（キューピッドガールズ）や、各大学との連携（つまみぐいウォーク）等は現在でも続いています。このような継続した活動により、２０１３年度には経済産業省の「がんばる商店街30選」にその年、東京都で唯一選出され、一定の評価も頂きました。これからは、前号（その１）でも触れた個店の自助努力（魅力アップ）を通じた、買い場作りを一つの目標にしています。

ワイワイウィークの様子

「キラキラ橘」は４年前より、食品スーパーの誘致を行ってきました。商店街で足りない品物が補完できることや、閉まっている個店が多い夜や日曜日の営業を行うことなどにより、商店街全体の利便性を高めるキーテナントとして、大きな役割を果たすことができると期待しています。また来年以降、キラキラ橘商店街の入口にある原公園から、約１００ｍの場所に大学が２校できることが決まっています。再来年に開校予定の千葉大学とはゼミを通じ連携を始めています。そこでの意見も聞きながら、今から準備をし、学生に来て頂ける導線作りも始めなければいけません。昨年・今年とキラキラ橘商店街を中心に開催された「すみだストリートジャズフェスティバルinひきふね」や、墨田区観光協会と進めている修学旅行の受け入れ、フィルムコミッションによるドラマの撮影場所誘致等、まだまだこれからですが、地域の環境が変わる今だからこそ出来る事の楽しみもあります。時間はかかると思いますが、地域に必要とされる商店街作りを目指していきますので、これからも下町人情キラキラ橘商店街をよろしくお願い致します。

夜市の様子

商店街は地域における準公共財であり、地域住民の生活を支えるライフラインである

（向島橘銀座商店街協同組合
事務局長　大和　和道）